

## 子育て支援における食育プロジェクトの推進 ～食生活に関する現状とニーズ調査から～

○赤井綾美, 文元基宝  
NPO 法人関西ウェルビーイングクラブ

要約：大阪市阿倍野区における食育プロジェクトの推進にあたり、住民参加の包括的な食育支援モデルの構築を目的に、乳幼児とその保護者を対象とした予備調査を行った。当事者のグループワークでは、食の安全・信頼に関する問題が、子育てにおいて大きな不安材料であり、ニーズとなっている現状が際立った。アンケートの結果、約4割が親の生活により子どもの食事時間に影響があるとし、半数以上が世代の異なる人との食事の機会や日本の伝統的な食べ物や郷土料理を食べる機会がないことが明らかになった。（索引用語：食育、ニーズ調査、協働）

口腔衛生会誌 58 (4), 2008

### 目的：

乳幼児期の「食」は心身の発達にとって大変重要な時期であるとともに、哺乳から捕食という人間としての「食べる」機能および味覚の発達にとって重要な時期である。しかし、乳幼児期における口腔機能の発達等に関する情報は、他の専門分野、一般市民への浸透がないのが現状である。

また、加工食品の浸透とともに育ってきた現代の親世代の「食」に対する意識や食行動が、子どもたちの健全な発達や発育への影響を及ぼしているような事例も少なくない。食育推進計画が進む中、地域の現状や生活者の声は、行政に届いていないのが現状である。

このような問題意識から、2007年度、大阪市阿倍野区保健福祉センターおよび同区の子育て支援連絡会からの要請で、当NPO法人および特定非営利活動法人こももネット（子育て支援の団体）、大地の会（地域活動栄養士の団体）、阿倍野区社会福祉協議会、阿倍野区コミュニティ協会との協働事業として、阿倍野区「食育」プロジェクトが立ち上がった。

今回、歯科・栄養・保育・子育て支援の専門職等の協働による、住民参加の包括的な食育支援モデルの構築を目的に、地域の乳幼児とその保護者の食生活に関する現状とニーズの傾向について、予備調査を行ったので報告する。

### 方法：

阿倍野区の子育て支援者および当事者の「食」に対する問題意識を共有し、プロジェクトの目的を明確にするために、支援者と当事者にそれぞれグループワークを行なった。その結果をKJ法により課題整理し、QOL・関心・食行動・食環境・社会環境、食に関するニーズについてのアンケート票を作成した。

アンケート調査は、阿倍野区主任児童委員の協力を得て、阿倍野区の3地区の「親子のつどい」のひろば事業および区役所内「子育て交流会」(H20.2.22～2.29)に参加した1歳から

4歳の乳幼児の保護者を対象とし、自記式にて行ない、65件の回答を得た。

### 結果：

当事者のグループワークでは、食の安全・信頼に関する問題が、子育てにおいて大きな不安材料となっている現状が際立ち、食環境や食行動による子どもの育ちへの影響についての問題意識や課題は少なかった。

アンケート結果からは、約8割の親が「食育に関心」が「ある」としたが、約4割が「親の生活による食事時間への影響」が「ある」と回答した。また、半数以上が「世代の異なる人との食事の機会」や「日本の伝統的な食べ物や郷土料理を食べる機会」が「ない」と回答した。自由記述の親のニーズでは、安心できる食材の提供や幼児期までのメニューの紹介や調理の方法、親子で参加できる企画を希望する声が多かった。

### 考察：

支援者と当事者のグループワークの結果、支援者が最近の親子の食行動や食文化の乱れについて危惧するほど当事者は重大に感じておらず、食についての問題意識のズレが大きいことが明らかとなった。

しかし、支援者同士の問題共有や親世代のニーズ調査の結果を支援者が共有する中で、支援者世代の社会的責任を振り返ることができた。特に、現代の食の問題や子どもの育ちを支えていく為の支援は、「今の親世代だけに背負わせるものではなく、色々な世代が協力して実践することが、今求められている」ということが再認識された。今後、その環境づくりのプロセスを多くの世代が経験、共有することで新たな地域の食文化を育成していくことが重要であると考えられる。

今回の複数の地域組織との協働・連携の経験は、今後の食育プロジェクトを推進するにあたっての新たな地域基盤の構築となったことの意義は大きいと考える。